

拓く

医師の意思疎通能力アップ

薫陶塾社長 黒岩かをる氏

インフォームド・コンセントの浸透などで、医療現場では関係者のコミュニケーション能力が課題になっている。「模擬患者」を使い講座を開く薫陶塾福岡市は、非営利組織(NPO)から株式会社化した異色の企業。黒岩かをる社長(56)は「市場の評価を受けサービスの質向上を目指す」と意気込む。

「えーっと……、痛いのはどの歯ですか？」「奥歯です」「口腔(こうくわう)の内、いや……、口の中を見せてください」

九州歯科大(北九州市小倉北区)で六月下旬、五年生九十人を対象に開いた講座。初診の中年女性という設定の模擬患者を相手に、学生三人が順番に問診をした。緊張して専門用語をつ

い口走ったり、リラックスさせようとして世間話に終わってしまった。初めてのこと戸惑っていた。「マニュアル通りでは患者の心情はくみ取れない」「いかに『医師側の論理』に立っていたか」などと患者への接し方を学ぶために生まれたのが模擬患者。日



黒岩社長の指導のもと、車座になって議論する九州歯科大の学生(北九州市小倉北区)

本で認知され始めたのは、講座で模擬患者を演じたのが転機となった。医学生ら

市場評価テコに質高める

患者に対する医師のコミュニケーション能力が問われるようになった九〇年代後半になってから。薫陶塾の業務は、模擬患者を使い問診や救急搬送など医療現場の様々なシーンを再現。関係者にコミュニケーション学習の場を提供する。これまでに全国で四百例に上る講座を開いてきたその母体は、黒岩が立ち上げた市民団体だ。大学卒業後、民間企業で人材育成業務に携わっている

の態度が変わるのを見て「閉病生活で見失いかけた、人材育成への情熱がよみがえった」

九九年四月、知人ら五人で模擬患者の研究会を立ち上げた。大学側の関心は高く、最初の一年で開いた講座は二十回。「法人化で公益活動としての責任を明確にしたい」と、二年後にNPOの認証を受けた時には、年間五十回の講座を開くま

くろいわかをる 1948年福岡県生まれ。修験館高校から津田塾大学に入学。自動車部で所属しラリーの出場経験も。模擬患者の研究会を立ち上げて以降、九州各地の大学で非常勤講師を務める。趣味だった「勝ち負けにこだわらぬ」は病気で断念。今の楽しみは、講義の終了後などに学生らとテーブルを囲み談笑すること。「年齢、立場に関係ない自由な議論に刺激を受ける」という。

「病院経営、患者中心に変わらなければ」

最近、ある医師と話す機会があった。問われて業務を説明すると「現場では患者の話を書く余裕がない」との返事。黒岩は「患者中心主義に変わらなければ、病院経営も成り立たなくなると」語気を強めた。

敬称略
西部支社 木代俊一郎